

## 角倉一族の歴史と文化的活動について

### 了以前の角倉氏と嵯峨地域

#### はじめに

近世初期、安南（現ベトナム）との朱印船交易に携わり、保津川（大堰川）・高瀬川や富士川を開削して舟運の利便に寄与した角倉了以、また了以の事業を継承するとともに、本阿弥光悦・俵屋宗達らの協力を得て嵯峨本を出版するなど文化事業にも貢献した子の素庵など、豪商として知られる角倉氏は京都との所縁が深い。

了以・素庵父子ら角倉一族は近代まで洛西嵯峨の地を拠点としていたのだが、角倉氏の拠点はなぜ嵯峨なのか。小稿では、了以前の角倉氏の活動の軌跡を辿って海外交易や大規模土木事業に乗り出すに至る発展の要因を探るとともに、角倉氏と洛西、とくに嵯峨地域との関わりについて考察する。

角倉一族の事績や嵯峨地域との関わりについては、豊田武氏や林屋辰三郎氏をはじめとして、近年では河内将芳氏や原田正俊氏らの研究の蓄積がある<sup>①</sup>。小稿はこれら先学の研究成果に負うところ大であることをお断りしておく。

#### 一 了以前の角倉氏

##### ①「羅山先生文集」にみえる角倉氏

近世初期の儒者・林羅山の文章をまとめた「羅山先生文集」には「吉田了

以碑銘」と題する一文が載せられている。吉田は角倉氏の本姓であり、吉田了以とは角倉了以にほかならない。了以の子素庵は近世儒学の祖藤原惺窩やその弟子林羅山と親交があり、角倉氏の系譜と了以の事績を記したこの碑銘も、羅山と素庵の交友を背景に作成されたものである。

野田 泰三  
肥留川 嘉子  
朝比奈 英夫

了以姓源氏、其先佐佐木支族、号吉田者宇多帝之後也云爾、世住江州、五代祖德春来城州嵯峨因家焉、其所居乃角藏地也、洛四隅各有官倉、在西曰角藏、語在沙門石夢窓天龍寺圖記中、德春子宗林、宗林子宗忠、皆潤屋也、而仕室町将家、宗忠子宗桂、薙髮遊天龍蘭若、嘗学医術、一旦從僧良策彦、逾溟渤赴大明、明人或稱宗桂号意庵、蓋取諸医者意也之義、還于本邦、其業益進、

引用したのは「碑銘」冒頭の一部である。これによれば、了以の祖は源姓佐々木氏の一族で、吉田を名乗り、近江国に住したが、徳春の代に山城国嵯峨に移り住んだ。徳春（応仁二年八月一六日没）の子が宗林（宗臨。天文一〇年十一月七日没）、宗林の子が宗忠（永禄八年七月晦日没）で「皆潤屋」、すなわち代々富裕な家筋であり、室町将軍家に仕えたという。

宗忠の子宗桂（元亀三年一〇月二〇日没）は「薙髮し天龍蘭若に遊ぶ、嘗て医術を学び」とあるように、嵯峨の天龍寺に入寺して医術を学び、策彦周良に随行して入明したという。策彦周良（一五〇一〜一七九）は天龍寺妙智院の住持で、漢詩文に優れ、遣明船の副使・正使として二度入明し、『策彦入明記』を残している。正親町天皇や武田信玄、今川義元、織田信長らとも親交があった。宗桂の子が了以である。



ことができるだろう。

## 二 中世の嵯峨地域と角倉氏

### ①描かれた中世の嵯峨地域

本節では、角倉吉田氏が拠点とした中世後期の嵯峨地域の特質について考えてみたい。

臨濟宗の名刹として知られる天龍寺には、中世後期の嵯峨地域を描いた三点の絵図・指図が残されている<sup>(6)</sup>。

嵯峨亀山殿近辺屋敷地指図（一九七・二cm×二二四・五cm）は、現在の渡月橋北詰西側に所在した亀山殿（建長七年（一二五五）に後嵯峨上皇が造営し、子の亀山上皇の御所となるなど大覚寺統に伝領された邸宅）とその周辺を描いた図である。亀山殿とそれに付属する邸宅や寺院・堂舎、側近の公家や僧侶の屋敷地が整然と並ぶ。現在渡月橋から天龍寺門前を経て清涼寺まで一直線に伸びる南北道は一年中観光客で賑わうが、平安期にはすでに存在した嵯峨地域の地割りの基準線となった道路であり、本図では「朱雀大路」との書き込みがなされている<sup>(7)</sup>。嵯峨地域のメインストリートとの認識の表れである。この道路を挟んで東側には小串氏など武家の屋敷地が散見することから、鎌倉最末期の様子を描いていると考えられる。

山城国臨川寺領大井郷界畔絵図（二二一・二cm×一四〇・八cm）には紙背に臨川寺開山である夢窓疎石による裏書・署判があり、貞和三年（一二三七）十一月、臨川寺領と天龍寺ほか他領が入り交じり相論が発生することを危惧し、寺領大井郷の境界を图示した旨記されている。

先述した亀山殿近辺指図に「河端殿御所」とあった地には臨川寺が建ち、「亀山殿」とその周辺は本図が作成される二年前に落慶法要がなされた天龍寺の境内にとつてかわられており、まわりには禅宗寺院も幾つか見える。亀山殿近辺指図の「朱雀大路」は「出釈迦大路」と記され、天龍寺門前から東へは「造路」が伸び、「紺屋厨子」「薄馬場」といった道路もあらたにみえる。臨川寺周辺には「在家」の注記があり、民屋が建ち並ぶ様子が見える。

三点目の山城国嵯峨諸寺応永鈞命絵図（二九〇・六cm×二四一・三cm、次頁

トレース図参照）は、応永三三年（一四二六）九月、ときの室町殿足利義持の命により臨川寺住持・月溪中珊が作成したもので、南は桂川の中洲・南岸から北は清涼寺と大覚寺を結ぶ線まで、ほぼ下嵯峨地区全域が描かれる。臨川・天龍両寺を中核として一五〇余の禅宗寺院が、大井郷界畔絵図には見えなかった多くの街路・在家とともに描かれる。天龍寺山門から東に伸びる「造路」の先には広場的空間と「天下龍門」があり、一種の結果を成す。

この三点の絵図を作成年代順に並べると、鎌倉後期、大覚寺統の拠点であった嵯峨地域（なかでも下嵯峨地区）は、臨川・天龍両寺の建立を機に、南北朝・室町期には禅宗寺院の林立するいわば「寺内町」へと変貌を遂げていることが歴然とする。

さらに一六世紀、戦国期の嵯峨地域の景観は、上杉本など数点の「洛中洛外図屏風」や狩野永徳工房の作成になる「洛外名所遊楽図屏風」などであることができる。

いずれにも臨川寺、天龍寺、清涼寺（釈迦堂）の伽藍が大きく描かれ、その間に雲間隠れに描かれた民家には卯建を有するものもある。応永鈞命絵図に描かれた通り、天龍寺の山門前には松の植わった長方形の築山、臨川寺門前の川岸には四角く張り出した船着きがある。

このように嵯峨地域は、鎌倉後期から戦国期に至る景観の変遷を絵図や絵画資料で辿ることができる稀有な地域である。現在とは異なって洛中とは独立した都市的空間が形成されており（嵯峨地域の町並みが京都市街と一体化するのは第二次大戦後である）、鎌倉後期の院御所の所在地から南北朝期以降の天龍寺・臨川寺を中心とした禅林都市へと、その性格も変容を遂げるのである。

### ②臨川寺領大井郷界畔絵図にみえる「吉田後家地」

紹介した天龍寺所蔵の絵図・指図のうち、亀山殿近辺指図には、「朱雀大路」に面して東側に「土蔵」が記されており、鎌倉末期にはすでに嵯峨の地に土倉が存在していたことが判明する。

大井郷界畔絵図では臨川寺の東、開山夢窓疎石の塔所（墓所）である三會院に接して「吉田後家地」の記述がある。その姓から判断するに、この吉田





後家こそ角倉氏の先祖と考えられる。

この地が三合院に隣接する臨川寺境内であることも注目される。一節で述べたように、室町幕府は臨川寺境内に所在する土倉・酒屋に対して諸税免除の特権を与えていた。吉田氏がのちに有力土倉・酒屋として活動することを考えれば、この「吉田後家」の時点でも諸税免除の恩恵に浴すべく臨川寺境内で土倉業を営んでいたと考えるのが自然であろう。

冒頭に引用した「吉田了以碑銘」や角倉家に伝わる「角倉源流系図稿」では、徳春（応仁二年八月一日没）が近江国吉田（滋賀県大上郡豊郷町吉田）より上洛し足利義満・義持に仕えたこととされるが、角倉吉田氏は南北朝初期にはすでに嵯峨の地に根を下ろしていたことになる。

### ③五山派寺院と土倉・酒屋の関係

応永鈞命絵図と同時期に作成された応永三・三三年の酒屋交名に一七軒の嵯峨酒屋が記載されていたように、洛中洛外のなかでも嵯峨は多数の酒屋が所在する地域であった。室町幕府が臨川寺境内の土倉・酒屋に特権を付与したとは言え、そのすべてが臨川寺境内に立地していたわけではない。原田正俊氏の検討に従えば、酒屋交名にみえる嵯峨酒屋はむしろ下嵯峨地区全域に散在していると言つてよい。では嵯峨地域に多数の酒屋が所在していたのは何故であろうか。

嵯峨地域にそれだけ酒の需要があったということも一因であろう。一五〇を越える寺院が存在し多数の僧侶が居住していたこの地域では、公私様々な局面で酒の需要があったであろうし、また嵯峨地域には僧侶以外にも、寺院生活を支える行者・力者や多数の商職人がいたはずである。彼らも含め相当数の人口を抱える嵯峨地域では日常的に大量の酒が消費されたであろう。しかしそれだけであろうか。

室町幕府は臨済宗五山派を「官寺」化し、その人事権を掌握するとともに、諸寺に寺領を寄進するなど経済的に手厚く保護した。また帰依する武家や公家などから土地や金銭米穀の寄進も相次いだ。

五山派寺院は寺領からあがる年貢や寄進された金穀を財源として、いわば「財テク」に励んでいた。幕府の権威と宗教的イデオロギーを後ろ盾に、

保有する金銭を融資する「祠堂銭」貸付はその代表的なものであるし、遣明船交易にも積極的に出資していた。禅僧には、教学や修行を担当する西班と呼ばれる僧侶のほかに、寺領経営など寺院の財政面を担当する東班と称される僧侶がおり、彼らが禅宗寺院に流れ込む潤沢な資金の運用にあたっていた<sup>(8)</sup>。

嵯峨の酒屋・土倉は、その五山派寺院の余剰資金を預かって自身の運用資金としたり、寺院が必要とする対明交易の献上物や交易品の調達を請け負っていた。嵯峨地域の禅宗寺院と土倉・酒屋は持ちつ持たれつの関係であったといつても過言ではない。禅宗寺院と土倉・酒屋が集中する嵯峨地域はいわば一大金融センターであったのである。

一六世紀初め、永正年間に山城下五郡の守護代に任じられた香西元長は、桂川西岸の嵐山山頂部に城郭を構えて居城とした<sup>(9)</sup>。京都盆地を西から押さえるとともに、丹波との交通路を掌握する軍事的意味合いが大きいようであるが、「都市」嵯峨の擁する資金や物資、人的資源も視野に入れてのことではないだろうか。

また五山派寺院には、対明交易など公的・私的な通交や僧侶間の人的交流によって、大陸から種々の情報や典籍がもたらされ、先進的な科学技術の知識が蓄積された。その情報・知識はさらに寺院・僧侶から嵯峨地域へと拡散する。「吉田了以碑銘」に、了以の父宗桂は天龍寺に入寺して医術を学び、妙智院住持の策彦周良とともに明国に渡ったと記すように、酒屋・土倉ら有力諸家の子弟の入寺は日常的になされたであろうし、その人脈を介して寺院に蓄積された知識が俗世間にももたらされた。医術以外にも算術や清酒製法に代表される酒造技術なども五山派寺院からもたらされたと考えられる。嵯峨地域は「知」の拠点でもあったのである。

禅宗寺院を通じて得た様々な知識を、角倉氏が家業の金融・酒造業、あるいはのちの河川開削工事に活かしたと考えるのはあながち的はずれではあるまい。南北朝期に嵯峨に根を下ろし、近世初期の了以・素庵の代にいわゆる「豪商」に成長した角倉氏は、まさに嵯峨の地の特性を背景に発展した一族といえることができるだろう。

## おわりに

戦国・織豊期における角倉氏の経営実態を考察した河内氏は、社会の有り様が大きく変動する織豊・近世初期に角倉氏と統一政権を結びつけた存在として医業に従事した吉田宗恂の存在に着目するとともに、太閤検地や南都諸白の流入による土地集積活動・本業酒造業へのダメージなど、近世初期の角倉氏の直面した状況を考えるとき、一族の庶流にあたる了以・素庵父子による海外交易・河川開削事業は「むしろ投機といった方が実態に近い」という興味深い指摘をなされている<sup>(10)</sup>。了以父子の事業を室町・戦国期の順調な経営成長の結果としてみるのではなく、中近世移行期にはある種の転換期に直面していたとの想定であろう。

引用した元亀元年の史料からは、複数の家による一族経営の在り方が浮かび上がってくるが、これも角倉氏流の対応の在り方を示しているのではあるまいか。

先行研究で指摘されていることであるが、京都周辺では一五世紀から一六世紀に至る過程で土倉の顔ぶれに変動がみられる。室町期に有力土倉として活躍する中村、沢村、野洲井といった面々の名前が消え、一六世紀には新興勢力が台頭してくる。筆者がかつて検討した賀茂別雷神社（上賀茂神社）の事例では、野洲井氏にかわって一六世紀にはあらたに大森氏が登場する。興味深いことに、この大森氏も角倉氏同様、一族で土倉業を営んでいた形跡がある<sup>(11)</sup>。大森氏、角倉氏らで確認される一族による土倉経営は、一族資本の結集というメリットとともに、社会の変動期にあたってはリスクの分散・危機回避という点からも有効な方策と言えるかもしれない。

さらに織豊・近世初頭には、角倉氏は、酒造、金融、土木、医業という一族による異業種経営を展開することになる。中近世移行期という社会の変動期を、角倉氏は独自の対応によって凌ぎ、家の存続を果たしたということが出来るだろう。

## 注

- (1) 河内将芳「戦国期京都の酒屋・土倉の一存在形態―中世角倉研究の拾遺」(『日本歴史』五二〇、一九九一年)、同「戦国期京都の土倉・酒屋と商・手工業座の一関係―角倉吉田宗忠と洛中帯座を中心に」(『日本歴史』五三八、一九九三年)。原田正俊「中世の嵯峨と天龍寺」(『講座蓮如』四、平凡社、一九九七年)。これ以前の研究については河内・原田両氏の論考に詳しいので、参照されたい。
- (2) 河内「戦国期京都の酒屋・土倉の一存在形態」
- (3) 永正一〇年七月二八日室町幕府奉行人連署奉書(内閣文庫所蔵「押小路文書」)
- (4) 河内「戦国期京都の酒屋・土倉の一存在形態」
- (5) (元亀元年) 極月二二日上野秀政折紙(田中光治氏所蔵文書)
- (6) いずれも『日本荘園絵図聚影二 近畿一』(東京大学出版会、一九九二年)所収
- (7) 中世の渡月橋は清涼寺門前からの南北道の延長線上には位置せず、現在の渡月橋よりもやや上流に架けられていた。
- (8) 今谷明「戦国期の室町幕府」(角川書店、一九七五年)
- (9) 今谷明「畿内近国に於ける守護所の分立」(『国立歴史民俗博物館研究報告』八、一九八七年)
- (10) 河内「戦国期京都の酒屋・土倉の一存在形態」
- (11) 永祿八年七月五日大森寿欽等連署起請文(賀茂別雷神社文書)



## 本学図書館所蔵の「角倉切」と「嵯峨本」

### 一 本学所蔵「角倉切」

「角倉切」とは、例えば『日本古典籍書誌学辞典』によれば、その項には「すみのくらぎれ〈古写本・古筆切〉」として、以下のような説明がある。

『後撰和歌集』の断簡。阿仏尼（あぶつに）を伝称筆者とする。角倉素庵（すみのくらすあん）の遺愛品という。園基氏（そのもとうじ）筆と極（きわ）められていることも多い。斐紙（ひし）の雲紙（くもがみ）と素紙（そし）を混用。縦二三センチ、横一五センチ台の四つ半切。一面十行、和歌は一首二行書き。鎌倉中期の写。／（杉谷寿郎）

すなわち、右にも言われるとおり、「もと、江戸初期の豪商・角倉素庵（二五七―一六三二）の愛蔵にかかるもので、この名を生じたものらしい」が、「しかし、根津美術館蔵の古筆手鑑『文彩帖』所収の一片に、古筆勘兵衛（一六二九―一六七四）の極札があり、かれの没後、いくばくもなくして切断分割されたことが考えられる」（小松茂美氏『後撰和歌集 校本と研究』（研究編）、「Ⅱ後撰和歌集の諸本系統／Ⅰ後撰和歌集諸本の類別／3 現存古写本／A 古筆切本／27 伝阿仏尼筆・角倉切」解説）という、『後撰和歌集』の断簡である。

元の所蔵者が角倉素庵であったことから「角倉切」の名も生まれたようではあるものの、「かれの没後、いくばくもなくして切断分割された」らしく、現在は「一面十行」に和歌や詞書が書かれた「四つ半切」の一片ずつが、諸所に点在している。そのあちこちに散在する「角倉切」について、立石大樹氏は次のように述べられたうえで（「角倉切後撰和歌集考」、関西大学『国文学』第九十一号、平成十九年三月）、

高城弘一氏は、平成七年九月一日の段階で『古筆学大成』以降、更に確

認された六葉の断簡を含め、二十九葉を翻刻紹介された。その後、管見によると更に八葉が確認され、計三十七葉によって本文を見ることが可能になった。（注（7）高城弘一氏「角倉切後撰集」本文拾遺」（大東文化大学紀要三十三号 平成7年）および、「続「角倉切後撰集」本文拾遺」（大東文化大学紀要三十四号 平成8年）の二本による。）

その三十七葉の「書写内容を歌番号で簡単に示」し、さらに「書写詳細」を「付の一覧表」に整理して掲載された。

一方、本学図書館にも「角倉切」の一片が所蔵されており、翻刻すれば次のとおりである。

わひ人のそほつといふなるなみたかは  
おりたちてこそぬれわたりけれ

返 大輔

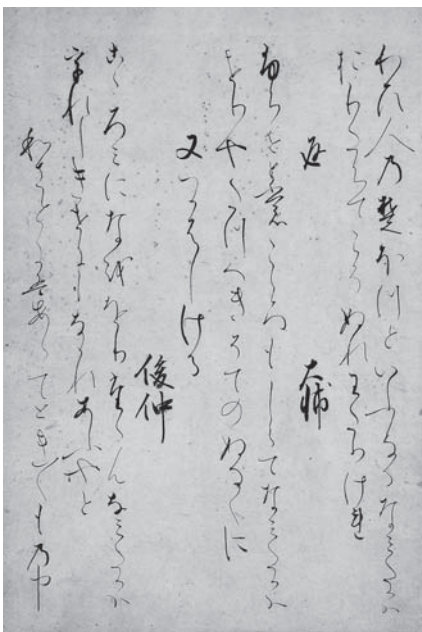
ふちせともこゝろもしらてなみたかは  
をりやたつへきそてのぬるゝに

又つかはしける

俊仲

こゝろみなををりたゝんなみたかは  
うれしきせにもなけれあふやと

わさとにはあらてときゝもの申



図版 1 本学所蔵「角倉切」

これは、『後撰和歌集』巻第十「恋二」の、『新編国歌大観』番号六一〇の歌本文から六一三番歌の詞書の最初の部分までに相当する。そしてこれは、右の立石論文の「一覧表」には載っていない。氏の一覧表の1（巻10、六〇六番歌から六〇八番歌詞書まで）と、2（巻10、六一四番歌下句から六一六番歌上句まで）との間を埋める一葉ということになると思われる。

『後撰和歌集』の本文の系統を考える上で、「角倉切」が、特に『後撰和歌集』の「現存伝本は大別すると、藤原定家書写本の系統と非定家本の系統とに分かれる。」（岩波版『日本古典文学大辞典』「後撰和歌集」の項、片桐洋一氏）と言われるその非定家本の中で、重要な位置を占めることは、何人もの研究者から指摘されている。例えば、早く小松茂美氏は、前掲『後撰和歌集 校本と研究』において、「角倉切」はなおわずかに四葉を確認した段階ながら、「相互に比較すべき断簡が少ないのは残念であるが、あるいは定家本に対立すべき一異本ではなからうか。」と予見された。さらには、以後の流れをまとめられた立石氏（前掲論文）のことはを借りれば、次のようである。

……その後、杉谷寿郎氏も、七葉の断簡を確認され、

角倉切の本文は、平安時代の流布本群である（二）古本系統の一種と認めてよいようである。

と指摘された。その後、再び小松氏は、二十三葉の多くを確認された上で、

この「角倉切」は「定家本」ともまた従来知られている別本系統（堀河本）とも異なる、新たに確認された一異本の出現ということになるのである。

と、指摘しておられる。

その後、田中登氏はこのような認識の上で、新出断簡の紹介とともに、今後は、後撰集の諸本分類において、あの白河切や胡粉地切、烏丸切など平安朝書写の古筆切同様に、この角倉切のためにも一つの系統を立てて考えてみる必要があるだろう。

と、既に諸本分類の中に体系化されている古筆切三種と、同等の本文研

究上の価値があることを指摘しておられる。（注「4」『日本古筆手鑑大成 第一巻 鳳凰臺』（昭和58年 角川書店）の杉谷寿郎氏の角倉切の解説による。）「（5）小松茂美氏『古筆学大成』第七巻（平成2年 講談社）による。」「（6）田中登氏『非定家本後撰集の古筆切』（『古筆切の国文学的研究』所収（平成9年 風間書房）による。）」

そして、右のとりの「角倉切」の重要性が明らかになるにつけても思われるのが、そのように貴重な本文をもつ『後撰和歌集』（「阿仏尼」にせよ「園基氏」にせよ、伝承筆写者についてはあくまで伝承の域を出ないようながら、鎌倉時代の写であることは確実とされる）を所蔵していたという、角倉素庵の古典学者としての見識の高さだということになるのではなからうか。ちなみに、奈良の大和文華館の特別展「没後三七〇年記念 角倉素庵」（会期 平成十四年十月五日～十一月十日）の図録に「14 角倉切「後撰集」が出ています。「個人蔵 角倉家伝来」で「現在、手鑑『筆林』に貼られている」この「一紙（一帖）」の図版に添えられた解説によると、

本断簡は『後撰集』巻第十四・恋歌六のうち「けるに。わすられてとしふるさとのほとときすな（<sup>マ</sup>）にひとこえ（<sup>マ</sup>）を（<sup>マ</sup>）なきてゆくらん。題不知、とふやとてすきなきやとにきにたれとこひしきことそしるへなりける。□（<sup>マ</sup>）はひわひて女のもとにつかはしける、露乃いのちいつともしらぬよのなかになとかつらしとおもひをかるる」の箇所である。

つまり、掲出の一葉に書かれているのは、『後撰和歌集』の『新編国歌大観』番号一〇〇六の歌の詞書末尾から一〇〇八番歌までで、とすればこれも、立石氏が確認された三十七葉の中にはない、一覧表でいえば16（巻14、一〇〇一番歌下句から一〇〇四番歌上句まで）と、17（巻14、一〇三〇番歌詞書から一〇三二番歌詞書まで）の間に位置する部分ということになると思われる。



## 二 本学所蔵「嵯峨本」

続いて、本学と角倉家とのゆかりを示すものに、やはり図書館所蔵の嵯峨本の謡曲『山姥』と『盛久』がある。「嵯峨本」は、これも便宜『日本古典籍書誌学辞典』によってその概要を辿ってみると、次のようである。「嵯峨本 さがぼん（古版本）」は、

慶長十三年（一六〇八）刊『伊勢物語』を魁とする、料紙・装訂ともに美術工芸的な意匠で彩られた、本阿弥光悦（ほんあみこうえつ）流書体およびそれと類似の書風を版下にもつ一群一類の版本をいう。……嵯峨本という呼称は、現在では……『観世流謡本』『新古今和歌集抄月詠歌卷』等、光悦が直に版下を書いたとするものを抜き出して「光悦本」と別称したりもするが、それらをも含む一群の総称として用いる。また呼称の由来は、角倉素庵（すみのくらそあん＝吉田玄之）が居住した洛西嵯峨の地に因む。すなわち当代きつての豪商であり、藤原惺窩に師事して漢学にいそしむほどに学芸を好んだ素庵が、これまた当代第一級の数寄者本阿弥光悦と計って、勅版の風格と桃山の美を兼ね備えた比類のない豪華本を世に送り出したとするのである。そうした史料は、概ね今日にまで及んでいるけれども、すでに宝永七年（一七二〇）刊『弁疑書目録』（書肆中村富平撰）に見える。書中「総テ嵯峨本ト云フハ。雲母ニテ。モヨウアルヲ以正トス」と断じ、さらに嵯峨本を角倉本とも呼び光悦本とも称して三者同義併称している。……（岡崎久司）

ところが、「本阿弥光悦と角倉素庵が、嵯峨本の開版・刊行にどの程度関与したかを正しく測定しようとする」とき、「関連資料と時代、そして何よりも現存の嵯峨本に即して明証を求める」ことには、「常に」「困難な課題」が「つきまとう」のでもある、という。

が、そのようでもありつつ、「ともあれ嵯峨本の出現は、日本印刷文化史上画期的な出来事であつて」「仏書と一部の外典に封じこめられていた中世までの出版界を一変させ、古典文学書を中心とする国書開版の口火を切る

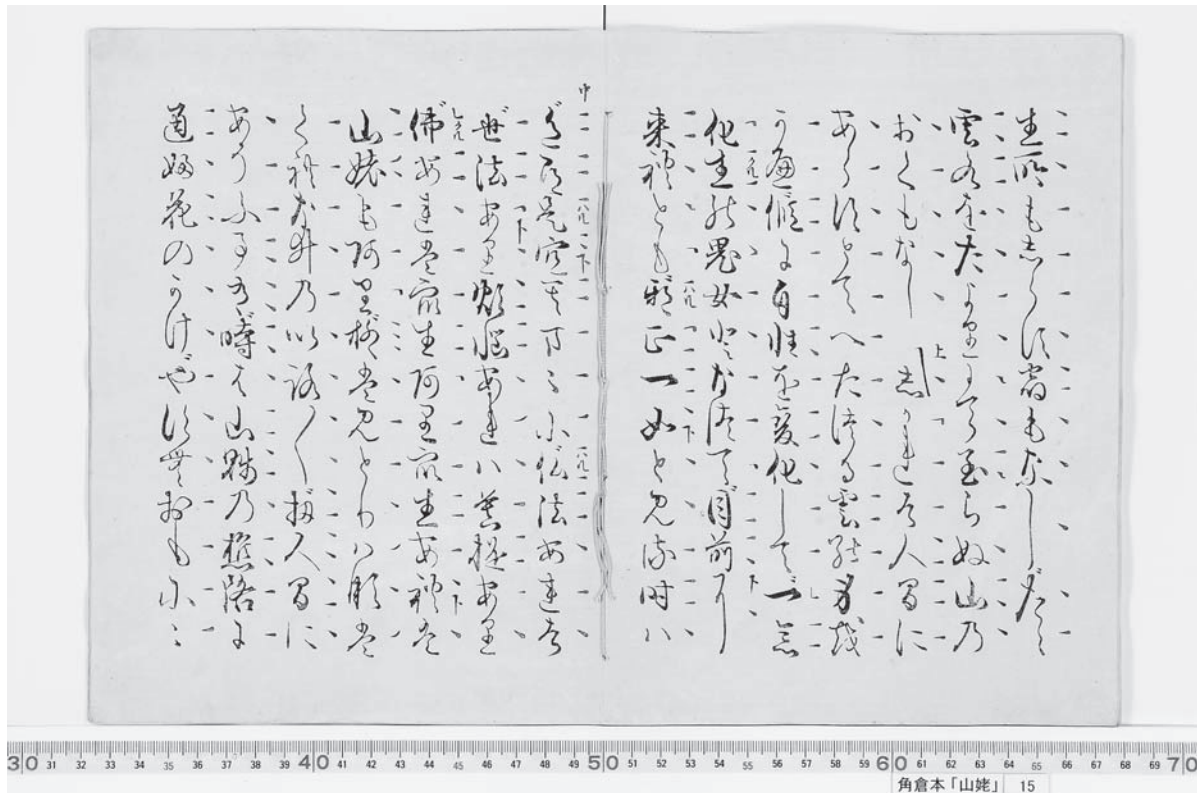
と同時に一気に盛況をもたらした」て、「一握りの伝統継承者から古典を解放し、新しい著作物出版の道をも拓いた」。そのうえ、「嵯峨本が極めて優れた底本に拠ったがために学術的価値が高く、その後のいわゆる流布本の祖となった」ので、「今日に至るまで、読書界・研究界ともども嵯峨本の影響下にある」、つまり、恩恵を蒙っている「といっても過言ではない」ということにもなった。「こうして嵯峨本が果たした役割と意義は、日本の印刷史をはるかに超えてまことに大きいといわなければならない。」という結論に落ち着いている。

右の解説を、このたびのこの方の関心から見直したばあい、以下のように言い換えなければならないであろうか。すなわち、各界に大きな功績を残した意義深い出版物である嵯峨本も、角倉素庵のそこへの関与に関しては、実は明確に言えることはあまり多くない、というふうに。ただそれでも、右のように言う『日本古典籍書誌学辞典』の解説自体に、次のようなことばもある。

光悦と素庵とが積極的に協同し、さらに稀代の天才画家俵屋宗達（たわらやそうたつ）が加わって、慶長・元和期に嵯峨本という大輪の花を咲かせたとする説は魅力的である。現象を寄せ集めた蓋然性からすると、一笑に付して斥けることはできないが、……

あるいは、例えば前掲の大和文華館の特別展図録「角倉素庵」の林進氏解説「素庵の軌跡―その書跡と書誌学的業績について―」では、

近年刊行された大著『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店刊、1999年）には、角倉素庵に関係がある「角倉切」（古写本・古筆切）と「角倉本」（古版本）の項が掲載されている。しかし、この辞典に少なくとも古活字版『史記』の初めての出版という書誌学的業績がある「角倉素庵」の個人としての項がないのはどういふことだろう。……ここでは、同書が改訂される場合を想定して、「角倉素庵」の項を未定稿として提示したい。



図版2 嵯峨本 謡曲『山姥』（五枚で一重ねにした第一折と、四枚で一重ねにした第二折で一冊にした列帖装の第二折（最終折）の、綴じ糸の見える頁）

として、「二『書誌学辞典』<sup>〔マ〕</sup>ための「角倉素庵」解説（未定稿）」の一章を設けられたが、その中では「我が国の古典文学・芸能書の実麗な装丁の版本「嵯峨本」（古活字版と整版本）を自ら出版した。写本でしか読むことができなかった古典書を世に広めた功績は大きい。」と、素庵と「嵯峨本」の「出版」との関わりにはまったく疑いの余地もない、という扱いをしておられる。ゆえに、ここでも当面やはり「嵯峨本」は、「角倉素庵……が居住した洛西嵯峨の地に因」んでその「呼称」がある、ということに照らしても、素庵その人が出版に深く関わった書物群である、という前提に立って話を進めたいと思う。そして、そのうえで本学所蔵の嵯峨本に話を戻すならば、いつでも謡本がわずかに二点であるが、そのうちの『山姥』は、表紙に雲母刷りが施され、料紙も厚手のものが使われているため一枚の紙の両面に文字を印刷することが可能であって、綴じ方も折り目を中にしてその折り目を糸で綴じる列帖装になっている。『観世流謡本』は、右引の『日本古典籍書誌学辞典』の説明にもあったとおり、「嵯峨本」の中でも特に光悦自身がその版下を書いたとされる古活字版で、もともと豪華な装釘の特製本では、表紙のみならず本文を印刷する各面まで色変わりの色地の上に雲母刷りが施されている。本学の『山姥』は、それに比すれば豪華さにおいてはやや劣る上製本のうちの一本である。

さらに『盛久』は、料紙も薄手なので紙の片面にしか文字を印刷できず、したがって綴じ方も袋綴じになっている並製本であるが、それでも表紙には雲母刷りが施されていて、版面も光悦流書体の古活字本であるという、「嵯峨本」らしい特徴はよく伺われるものである。

### 三 『西鶴織留』巻二の一の章

以上が、本学所蔵「嵯峨本」（謡本）の概要であるが、本学と角倉一族とのゆかりをもたらし文化遺産でもあるこの「嵯峨本」は、先述の「角倉切」ともまったく同様に、一口に角倉一族といっても歴代多士洛々の中では特に、角倉素庵に関わるものであった。その素庵は、例えば『国史大辞典』「すみのくらそあん 角倉素庵」の項（林屋辰三郎氏）では、まず「江戸時代初

期の思想家」と解説される一方で、前引の小松茂美氏や岡崎久司氏がその解説文中で「豪商」と呼んでもいたとおり、「豊かな経済力を背景として、父了以の海外通商・河川疎通などの事業に積極的な協力する実務能力」をもつ（『国史大辞典』）人でもあった。

その了以、素庵父子らの角倉一族とその仕事を、同時代もしくはやや後の時代の人々がどのように見ていたか、が知られる文章が、文学作品の中にもある。『西鶴織留』巻二の「保津川のながれ山崎の長者」の冒頭は、次のようである（引用は、日本古典文学大系『西鶴集下』による）。

本朝は、天照太神元年より今元禄二年の初春まで、二百卅三万六千二百八十三、此國豊に續て、なを君が代の松はひさしきためし、富士を常住の蓬萊山、不老門のひがしに武藏野の満月、外天のひかりに同じからず。御紅葉山の木ずる千秊の色をまし（頭注「原本「色ををまし」とあるのは一字衍。」、万歳（ばんざい）の海龜（うみかめ）、さゝ浪静（なみしづか）にすめる、江戸は天下の町人北村・奈良屋・樽屋をはじめ、諸國の惣年寄・金座・銀座・朱座、此外過書の舟持、世上に名をふれて、是皆町人の中の町人鑑（かみ）といへり。時に都の嵯峨の角倉は、其家榮（そのさかへ）て長者のごとし。然も二十余人の子寶、いわ井の水の高瀬川に、すぐなる道橋のわたり初して、此流れに一棚舟をかよはせ、俵物・薪（き）をのぼし、洛中のたすけと成、竈（かまど）の煙にぎはへり。又保津川のながれは、丹波の龜山につぎきて、嵯峨まで二里あまりの所、近代切ぬきの早川、是を自然と乗覺て、船人（せんじん）ちからも入らずして、岩角（いわかく）よけて滝（たき）をおとし、ひだりは愛宕（あたご）、右は老の坂、此山間の詠（よ）め、松嶋（まつしま）をちかふして見るぞかし。

『西鶴織留』は、元禄六年（一六九三）に亡くなった井原西鶴の遺稿集であるが、すくなくともこの章の執筆は、文中に「今元禄二年の初春まで」とあって、元禄二年正月の出版を予定して書いていると見られることから、その前年の元禄元年（一六八八）九月に貞享五年から改元（かえん）の秋から冬頃と考えられる。その時点で角倉氏は、まず「過書の舟持」（頭注「徳川時代淀川往來の貨客船を過書船という。舟持とあるが、ここは過書船支配の木村惣右衛門

（京柳馬場二条下ル町）角倉与市（京川原町二条下ル町）をいう。」として、「將軍家お膝下」（「天下の町人」の頭注）「江戸」の「北村・奈良屋・樽屋をはじめ」とする「諸國の町人の中の町人鑑」といわれる人のうちに数え上げられている。

それからあらためて「其家榮て長者のごとき」都の嵯峨の角倉（『対訳西鶴全集』後注に、「角倉氏は本姓吉田氏、中世末西嵯峨に住み、酒造業・土倉業を営み繁榮し、角倉（角藏とも）と呼ばれるようになった。今の右京区角倉町がその跡という。西鶴当時は、川原町二条の京角倉（本家）と嵯峨角倉（次男家）と分かれていたが、中世末から近世にかけて活躍した、角倉了以・素庵（与一）のころは嵯峨であつたので、ここも「嵯峨」という。」とある）が開鑿した「高瀬川」が、「此流れに一棚舟をかよはせ、俵物・薪（き）をのぼし」た結果、



図版3 『西鶴織留』巻二の一「保津川のながれ山崎の長者」挿絵

「洛中のたすけと成、竈の煙にぎは」うことになったことが語られ、さらに「保津川のながれ」（頭注「大堰川の上流を遡って、丹波国船井郡世木村・嵯峨間を通ずる運河。慶長十一年三月着工、同年八月完成。」）が「近代」の「切ぬき」（頭注「了以の考案で鉄椎・火薬を以て岩石を砕破して切り開いた。奇石・激湍が多いので舟行に熟練を要するが、五穀・塩・竹・木などを丹波から京へ輸送する重要な水



路であった。」によって開かれ、「松嶋をちかふして見る」ような景勝の「早川」を舟が行き来できるようになっている様子が描かれる。

『織留』のこの章は、この後いわば本題に入って、

有時山崎寶寺のほとりに、油のうけ賣して、山家がよひの商人、此舟に乗てくだりしに、猿飛といふけはしき所を、むらざる数かぎりもなく渡りしに、二疋つれたるけざるが、栗の梢を傳ひ、此川をわたりかねたる風情見えしに、折ふし狩人のまはり來て、鉄炮にねらひよれば……

その「二疋つれたるけざる」のうちの一匹は撃ち殺されてしまった。一緒に木から落ちたもう一匹を見れば盲目で、殺されたのはこの盲目の猿の「子猿」であったが、狩人はその親猿の方も「即座にたきころ」そうとしたのを、「早船をさしとめ」これを見ていた乗客のうちの「山崎の商人」が、「錢二百文に買とり、我里につれ歸りて、二とせあまりも飼置、随分いたはりける」。「その年のくれになりて、此油賣わづかの事に仕舞かねて」妻子を連れて夜逃げせざるを得なくなったとき、「此猿」が「口のうちより」「金目三匁あまりのむかし目貫」を「取出し、内義に手わたしたいし」たために「夜ぬけの事は沙汰なしに」なり、のみならず「明の年は商賣に油断なく、それより次第に家築て」「十四五年のうちに山崎の長者とな」った、という。話はさらに息子の代に及び、息子も「親の譲りの金銀」に頼らず「我と才覚して、富貴になり」、「それより一代のうちに七千貫目儲に有銀、廣き都に三十六人の歌仙分限の内に入」て、「……かく長者になる事、町人の鑑也」と結ばれる。

この章について、野間光辰先生は次のように評された。

……もと『町人鑑』の首章として書かれたものに相違なく、……「油問屋山崎屋嘉兵衛」（『京羽二重織留』『国花万葉記』）の先祖が、……猿に憐れみをかけたことから運を開いたといふ致富談である。一見猿の報恩といふことが、この章のやまのやうに思はれもし、またそこに読者の興

味も惹かれるのであるけれども、作者の意図はむしろ、山崎屋の惻隱の情に発した美しい行為がおのづから「天の道」に叶ひ、窮乏の中から再び家運を回復する因となつたことを強調するにあつたのである。つまりこの章は首章にふさはしく、「仁之部」に属する話を以て充てられたのであらう。（『西鶴と『堪忍記』』、『西鶴新新攷』所収、傍点原文）

そして、宇野多鶴子氏は右の解釈の延長線上に、これが単なる「猿の報恩」譚ではなくて、猿の「獸状人心」と、それをよく解して応えた油売りの商人夫婦の「人心」が「天」に嘉せられ、後の富貴もそれによってこそ叶つたのであつたろうことを、本文に即して嚴密に論じられた（『西鶴織留』の一章——猿の役割——、『叙説』平成五年十二月）。

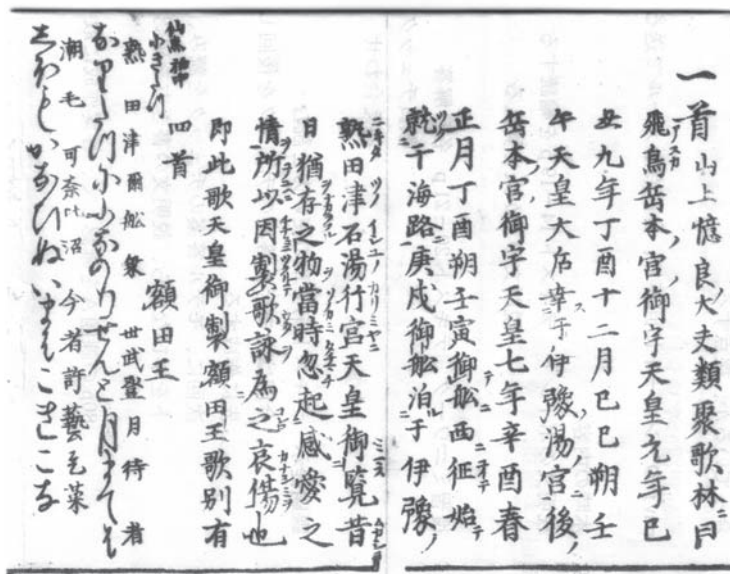
猿の話の解釈の詳細は、右の論文そのものに拠っていただきたいが、これを要するに、この油売りの商人もしくはその家が「町人の鑑」と称せられたゆえんは、これも単に「商賣に油断なく」稼いだ結果、巨万の富を築き上げたということだけではなくて、その根柢に「天の道にかな」った「仁」の心が認められた、ということこそあつたであらう。そしてそうであることがわかれば、この話の枕のようにして冒頭に「都の嵯峨の角倉」のことが語られていたことも、いかにもふさわしいことであつたとうなずかれる。そこで角倉氏が「町人の中の町人鑑」とい「われていたのもまさしく、「豊かな経済力を背景として」権力に取り入り、「特権町人」（日本古典文学大系『西鶴集下』『金座』の頭注）の地位を手に入れて「世上に名をふれ」たことが称せられたりしたわけではなくて、むしろ逆に、その富と権勢にあぐらをかいたりせずに「洛中の」人々の「たすけと成」、他の多くの家々の「竈の煙」を「にぎは」わすべく、所有する「豊かな経済力」を用いた、そのことが「人の鑑」と認められた、ということこそあつたであらうから。

（肥留川 嘉子）

## 角倉素庵の古典学

— 藤原惺窩と素庵 —

角倉了以と子の素庵は、近世の京都、ひいては日本の経済、産業の発展に大きな功績を残した実業家である。この父子は、そのみならず、古典文化や芸術の世界でも重要な役割を果たした。この報告では、とくに素庵について優れた教養人としての側面を報告する。



(資料『万葉拾穂抄』巻一・八番歌 塙書房『万葉拾穂抄 影印・翻刻』I、2002。但し紙幅の都合で上段の注は省いた)

右に掲げた資料は、北村季吟の著した『万葉拾穂抄』の本文である。季吟については、『万葉拾穂抄 別巻』（新典社、一九七七）に桜井満氏による要を得た解説がある。次の通りである。

北村季吟の『万葉拾穂抄』は、万葉の時代からほぼ一千年を経て初めて著された『万葉集』の全注釈である。

季吟は寛永元年（一六二四）十二月十一日、近江国野洲郡祇王村北村の医者で、永原天神の連歌宗匠であった宗円の長男として生まれた。早くから医学を学び業を継いだが、古典への志も強く、寛永十九年（一六四二）、一九歳で松永貞徳の門に入り、古典・和歌・俳諧を学んだ。承応二年（一六五三）、三十歳の時に、十年余り教えを受けた貞徳が没し、その後は飛鳥井雅章・清水谷実業に和歌・歌学を学んだという。やがて家業を廃し、古典の講義によって口を糊したようだ。ちょうど、『万葉拾穂抄』に着手したころに、京都五条の新玉津島神社の宮司になっていた。そして元禄二年（一六八九）十二月、六十六歳で幕府の歌学所に召され、江戸に移り住み、宝永二年（一七〇五）六月十五日、八十二歳で没した。

右に言う「『万葉拾穂抄』に着手したころ」とは、およそ天和二年（一六八二）ころのことであったとされる。

さて、『拾穂抄』は、上の資料（巻一・八番歌）を見て分かるように、他の万葉集の伝本とは異なる独自の形態を取っている。この八番歌は、『万葉集』の諸本いずれも、題詞に「額田王歌」と記し、左注に「右檢山上憶良大夫類聚歌林曰：」で始まる詳細な作歌事情の説明を掲げている。ところが『拾穂抄』では、題詞を「一首」とし、その下に続けてやや小字で「山上憶良大夫」という文言を記している。この部分は、右に述べた八番歌の左注の記述にあたる。そして、その後のやや下部に作者名として「額田王」の名を記しているのである。さらに本文と訓も、『拾穂抄』では、平仮名で書かれた訓が本文の位置を占め、『万葉集』の原文である漢字はその右に添えられるという形を取っている。つまり、諸本では「題詞（作者名）↓本文（原文）」と訓（仮名）↓左注（作歌事情）」という次第で記されるものが、『拾穂抄』では「題詞（歌数+作歌事情）↓本文（仮名の訓）と原文↓作者名」という形態に改められているのである。『拾穂抄』がかような形態を取った由縁については、季吟自身が冒頭の総論の中で次のように述べている。

今予が所用之本は此仙覚が本をもて妙寿院<sup>冷泉殿</sup>の校正し給へる本とかや、歌の前書・作者の書やう・訓点等まことに藤斂夫の所為しるく学者の益おほく見やすけるへければ、しはらく用ふ侍し。

これによれば、『拾穂抄』の形態は、季吟が底本として用いた「冷泉殿（藤斂夫）」すなわち藤原惺窩の校正本の形態を尊重しそれを踏襲したものであることが知られる<sup>二</sup>。さらに『拾穂抄』に載る冷泉亭人（冷泉為経）の序は、この間の経緯を次のように記している。

我先惺窩有「家伝一本」取「数本」校「正之」、秘不<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>於家<sub>一</sub>。時田玄之懇求<sub>レ</sub>之、惺窩不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>已<sub>レ</sub>許<sub>レ</sub>之。玄之太喜、謄写以伝<sub>二</sub>其家及曾孫<sub>一</sub>。玄恒与<sub>二</sub>北村季吟<sub>一</sub>者有「素好」故使<sub>二</sub>彼得<sub>レ</sub>写<sub>レ</sub>之。今拾穂鈔所<sub>レ</sub>由起也。

知られているように藤原惺窩は下冷泉家の出身である。惺窩は、手元に有していた「家伝一本」を他の数本と校合して校正本を作成した<sup>三</sup>。その本を吉田玄之が懇望し「謄写」して家に伝え、曾孫の玄恒がかねて好を通じていた季吟にこれを写させた、というのである。ここから、『拾穂抄』が独自の形態を取る由縁は惺窩の校正本にあると言つてよく、その根底には藤原惺窩その人に対する尊崇の念があつたと見てよからう。さらに言えば、惺窩への敬意は季吟ひとりのことではなく、そもそも惺窩本を写した吉田玄之にも共通する。そして、この玄之こそが角倉素庵その人なのである。

藤原惺窩は近世初頭に活躍した朱子学の大家である。その人となりについては、大田青丘氏の『藤原惺窩』（吉川弘文館、一九八五）に詳しいが、ここでは同氏による『日本近世人名辞典』（吉川弘文館、一九九五）の解説を挙げておく。

藤原惺窩 一五六一〜一九一九 安土桃山・江戸時代前期の朱子学者。名は肅、字は斂夫。惺窩はその号。（中略）永禄四年（一五六一）播磨国三木郡細河村（兵庫県三木市細川町桃津）で藤原（下冷泉）為純の三男として生まれた。彼が藤原定家の十一世の孫であつたことは、彼の学

風と深い関係を持つ。（中略）慶長五年、入洛中の家康に深衣道服で謁したことは、形式的にも僧侶を去つて儒者たることを顕示したもの。同九年にのちに家康に仕えて江戸時代朱子学の総本山の観を呈した林羅山が入門、また関西朱子学の大宗となつた松永尺五・堀杏庵・那波活所・菅得庵・石川丈山・林東舟（羅山の弟）・吉田素庵・吉田意庵らがつぎつぎに入門、その余波は和歌山藩主浅野幸長をはじめ多くの大名に及び、後陽成天皇も惺窩に道を問うた。こうしたことが惺窩を近世日本朱子学の開祖と言わしめた理由である。

このように惺窩は儒学者として高い学識を持ち、門下には時代を領導する俊秀を多数、擁していた。さらに、その学識は儒学のみならず日本の古典学にも及んでいたことが、「出入於釈老、閱歷于諸家、兼習日本紀、万葉集、歷代倭歌詩文等」（林羅山「惺窩先生行状」）という評言から知られる。惺窩のかような関心のあり方は、いうまでもなく下冷泉家を出自することと深く関係するものと思われる<sup>四</sup>。惺窩が万葉集を校正したのも、こうした古典学の営みの一つなのだが、このことには、もう一つ、重要な意味がある。というのは、前述の通り、惺窩が校正の際に用いた底本が「家伝一本」とされているからで、それはすなわち、冷泉家に伝来した万葉集に他ならないと考えられる。そうであれば、惺窩の校正本は、万葉集の伝来史の上でも貴重な位置を占めるといえる。

冷泉家に由来する万葉集として、いわゆる冷泉本系に属する伝冷泉為頼筆本と広瀬本がある。伝為頼筆本は巻一の零本だが、広瀬本は書写されたのが天明元年（一七八一）と江戸後期に下るものの、二〇巻の完本で、かつ巻二十の奥には祖本に由来すると見られる識語がある。そこに「参議侍從兼伊予権守藤」という署名があり、これが藤原定家のことで、広瀬本が定家の手になる本を祖とすることが明らかになった<sup>五</sup>。

藤原定家が日本文学史上できわめて重要な位置を占めることは、いうまでもない。その定家の手になった万葉集を写したものであることから、広瀬本が貴重な価値を持つこと、それ故に万葉集の研究に大きく資するものであることも論を俟たない。かように定家とその流れを汲む冷泉家の存在は、大き



な意味を持つのであって、そこに由来する典籍は信頼すべき素性を有するものと見なされることになる。先に述べたように、藤原惺窩が「家伝一本」を基に校正本を作成したのであれば、その惺窩本自体もまた、冷泉家由来の伝本としての価値を認められていたのではなからうか。吉田素庵が「懇求之」と惺窩校正本を披見することを願ったのも、惺窩への尊崇の念とともに、その校正本の価値をよく承知していたからだと思われる。そしてその数十年後、季吟が万葉集の注釈を志したとき底本としたのが惺窩校正本であったことも、その価値を認めてのことであったといえよう。

冒頭に紹介した通り、季吟の『万葉拾穂抄』は、万葉集の全歌注釈の嚆矢をなす。たしかに内容から見れば、旧注の集成で独創的な見解に乏しいという面も持つ。しかしながら、季吟自身が冒頭の総論の中で、度々、学ぶ者の見やすさ、便のよさを重んじたと述べているように、やがて盛んになっていく近世の古典学の展開の上で、『拾穂抄』が啓蒙的な役割を果たしたことは、評価されてしかるべきであろう。そうした古典学の発展の根底を、吉田素庵と曾孫の玄恒が支えていたのである。以上に述べてきたことから藤原惺窩校正の万葉集と、それを受け継いだ北村季吟の『万葉拾穂抄』は、中世から近世への時代の変転の中に垣間見える人と人とのつながりが生み出した文化的な所産であるといえる。かような意味で、吉田素庵とその一族、すなわち角倉氏は、よく知られているような豪商、実業家、そして開拓者という活動だけでなく、古典文化の価値を理解しその世界を心から敬愛して、文化の継承と維持に務めた存在であったことが知られるのである。

藤原惺窩の校正本、それを写した角倉本は、現在、伝わっていないが、もし、現存すれば、それ自体が貴重な文化財であり、古典の学術研究に大きな価値を発揮するはずである。藤原惺窩、吉田素庵、北村季吟というつながりの中で、角倉氏の残した功績が貴重なものであったことを確認して、この報告を閉じたい。

## 注

一 北村季吟についての専著には、野村貴次『北村季吟の人と仕事』（第2版）

（新典社、一九八六、初版は一九七七）、島内景二『北村季吟 この世のちの世思ふことなき』（ミネルヴァ書房、二〇〇四）がある。

二 野村貴次「季吟の万葉拾穂抄」「万葉集大成2 文献篇」（平凡社、一九五三）は、「仮名書きはその師松永貞徳の遺志により季吟が作為したもので、底本は漢字を主体にその傍らに仮名が附いていたものと思われるが、その他の特色は惺窩の作為によるものと考えられている」と指摘する。大石真由香氏は、野村氏の論を踏まえつつ、さらに天理本、東洋文庫蔵白雲書庫本等を含めた丹念な調査を行い、惺窩本の作成意図と特質を明らかにした。その上で、『拾穂抄』がどのような態度で惺窩校正本を受容したかについて考察を及ぼしている（『惺窩校正本『万葉集』について―天理図書館蔵『古活字本万葉集』の検討から―』（『古代学』第1号、二〇〇九・三）、「万葉拾穂抄」と惺窩校正本『万葉集』（『叙説』第40号、二〇一三・三）。

三 惺窩の校正本は現存しないが、東洋文庫蔵の白雲書庫本がその系統を汲むとされている。白雲書庫は近世初頭の医者、野間玄琢、三竹父子の蔵書を集めた書庫で、三竹は惺窩の門弟である松永尺五に儒学を学び、また吉田素庵とも親交があったことが知られている（伊藤善隆「野間三竹年譜考」湘北紀要第29号、二〇〇八）。

四 国文学における惺窩の位置を考察した論として、池田亀鑑「藤原惺窩と国文学」（『近世文学の研究』、至文堂、一九三六）がある。

五 『校本万葉集』第十八冊解説（岩波書店、一九九四）。

（朝比奈 英夫）

【付記】平成25年6月1日に本学の春期公開講座「角倉一族と京都―歴史・文化の視点から―」（担当は文学科）が開催され、二百名を超える来聴者があった。本論文の各章は、その公開講座の中で行われたミニシンポジウムでの報告を基にしている。

